

メールレター(28)

あー思えば遠くに来たもんだー♪♪♪ こんなコマーシャルソングが昔ありました。イースター祭にスーツケースにチョコレートを入れ、マダム田中とドリトル先生は、ニューブランズウィック州フレデリクトン市に住む次男一家を訪ねることにしました。

モントリオールから小さな飛行機で約1時間。えー嘘!!ここってコンビニ?と間違えそうな建物がフレデリクトンの空港でした。手を振る次男一家が見えます。荷物は1秒もまたず、「はいよ!」と、建物に入ったらすぐとれ、目の前に止まっている車に乗り込みました。

「シンプルライフねえー」

「それくらいが取り柄かも。」

ニューブランズウィック州は、基本的にはバイリンガルですが、実際は英語系が80%を占め、残り20%が英仏のバイリンガルです。英語ができないと暮らしていけないようです。フレデリクトンはその州都です。フレデリクトンの街並みは古く、洒落ていますがほんの1分も行き過ぎると街並みは消え、林が続きます。自然に恵まれ風光明媚な所ですが、人気がない。

やや、人が集まる、この町の中央にある、サンジャン川沿いの古い建築のビーバーブルック美術館を訪れてみました。この美術館は個人の寄付によるものだそうです。価値ある物も無い物も、さほど注意を払って展示しているとは言えないのですが、奥の部屋に展示された、ダリの大小5点の作品は素晴らしいものでした。中央に展示されたダリの大作(Santiago el Grande)はまさに圧巻でした。

次男は、ここフレデリクトンにあるカナダ最古の大学、ニューブランズウィック大学の森林環境学部の準教授となり講義と研究をし始めて半年になります。赤レンガのなかなかしゃれた大学です。日本の留学生も数人いるとか。イースターで大学は休みでしたが、大学の中に入って研究室を訪ねてみました。講義室も大きく、研究も出来るようになっています。

深刻化する地球の温暖化とそれに対応する森林環境を研究する研究所の充実を図ることが、次男のこれから5年間の課題となるようです。研究所を訪ねてみると、

「ほら、ここなんだけど、ここで色々な木を種から植えて、成長過程を研究していくんだ。楽観していたカナダの森林も、当節の急激な温暖化で、2030年には限界に達しそうだからね。助手の学生もたくさん雇うことになると思うよ。研究費はもう政府からおりたし。」

長い道のりです、木を種から植えていくなんて。5年でものになる木なんて、一体どれだけあると言えるのでしょうか。

「ちょっと、あっちもこっちもレタスでいっぱいだけど。。。」

温度も湿度もコントロールされている研究所は、高齢化した、定年退職を待つのみ教授たちからいつの間にか見放され、研究用の木を植えず、レタス畑と変わり果てていたのです。それにしても、一体、このレタスは誰がどこで食べるのでしょうか。

由緒ある大学の名誉のためにもカナダの森林環境のためにも、ここの立て直しをするには美形の、情熱に溢れた若手の教授の出番が必要だったのかもしれませんが。研究所の入り口の掲示板に展示されている専門誌の記事も次男のものばかりです。

「君は畏にかかったみたいだね。定年間際の老いた蜘蛛の巣にかかった美しい大きな蝶のように見える。」

ドリトル先生の深いため息が聞こえてきます。息子が立ち向かっていく、5年間の厚い壁が目の前に浮かんだきたかのようです。

「教授職はなかなか今はないんだよ。研究所を任されるということもないしね。大丈夫だよ。」

「男の人生には必ずこういう難関はあることだろうし、先ず頑張ってみるしかなさそうだね。」
男の道は、洋の東西を問わず難しそうです。

「それにしても、レタスはやめなさい。カナダの森林の将来が君の肩にかかっているんだ。きちんと木を植えなさい。」

一同、レタスを眺めて苦い笑いを浮かべるのでした。

折しもイースター。翌日は、ジゴダニヨ(仔羊の脚のロースト)を食べたとは、孫たちとイースターの卵探しです。茹でたり中身を抜いた卵に彩色し、庭や家の中のあちこちに隠して、子供達に探させます。見つけるとチョコレートと交換します。次男の家では、最初から柄付きの、うずらの卵大のチョコレートを庭に撒き散らし、籠を子供達に渡し、探させます。

子供達は必死で探し回ります。マダム田中も、5歳のエリーズにくっついて、雪の消えない庭を這いつくばって必死で探し回ります。

隣の家の子が庭で遊びながら、こちらをうらやましそうに眺めています。

「エリーズ、あの子にも一つあげましょう。どうぞって英語で言ってらっしゃい。」

ニコッとするとエリーズはかけていきます。一つあげてあわてて戻ってくると、

「あの子のうち、妹もいるのよ。」

「じゃー今度はもう一つ、これ、貴方の妹にとってあげてきなさい。きちんと英語でどうぞっていうのよ。」

「オーケー」

ニコニコと、またかけていきます。今度は次男の息子のルカとお嫁さんと一緒に近所の散歩です。人気のない子供の遊び場を抜けると藪林です。

「ルカ帰り道はどこ、ここって崖じゃないの。貴方が行くところ。」

「じゃーこっちはどう、」

「そっちは藪よ。このドジの、役立たず。」

ルカは笑い転がっていますが、マダム田中は、藪の中を滑らないよう、必死です。家に戻ってみると、エリーズは隣家の姉妹と仲良く走り回って遊んでいます。しかも英語で。これから仲良しになれそうです。子供には言語の壁はないようです。

帰宅の途につくことになりました。降り続く雨と雪解けでサンジャン川は氾濫し、空港までの道は浸水し、岡の上を通るしかなさそうです。飛行場までたどり着き、無事に飛行機に乗りこみ、命辛々の思いで帰宅の途につきました。遠〜くの旅は疲れます。